

冠動脈CTA 高度石灰化症例における心筋血流シンチとその融合画像の臨床的有用性

¹大阪警察病院、²大阪警察病院、³川崎病院

藤沢 康雄¹、清本 昌義¹、越宗 豊¹、東出 敏明¹、西尾 まゆ²、上田 恭敬²、児玉 和久²、善積 透³

(背景および目的)MDCTによる冠動脈CTA(C-CTA)は多くの施設で行われており、臨床的には有効な診断方法となっている。冠動脈狭窄病変の検出能は、感度が86~99%、特異度が95~97%、陰性反応的中率が98~100%と報告されている。しかし、C-CTAにおける高度石灰化症例の場合には診断が困難なことがある。また、心筋血流トレーサは心筋細胞内に摂取され、冠血流量に依存したイメージが得られ、心筋viabilityの評価が可能とされている。今回、C-CTAで評価困難であった高度石灰化症例における心筋血流シンチとその融合画像を用いることで診断、治療方針の決定、虚血部位の詳細な同定まで可能かを検証した。(方法)対象は、2008年2月~2008年8月の間でC-CTAを施行され高度石灰化のため1セグメント以上で評価が困難であった45症例に心筋血流シンチを行った。(結果)検討した45症例中30症例は心筋血流シンチ正常例であった。心筋血流シンチ異常例15症例のうち冠動脈血行再建術が実施された症例が10例、側枝や末梢血管の狭窄がdetectされたのが5症例あった。C-CTAで評価困難であった高度石灰化症例における心筋血流シンチとその融合画像を用いることは責任血管等の機能的狭窄の同定ができ、治療戦略に役立てられる。